



「あられ」と「ひょう」はどうちがうの

直径 5 ミリメートル以上の、氷のつぶが「ひょう」

「あられ」は、雲から降る直径 5 ミリメートル以下の、球形に近い氷のつぶで、「雪あられ」と「氷あられ」があります。

「雪あられ」は、雪といっしょに降ってくるもので、雪のように白く、かたい地面にあたると、はずんでよく割れます。「氷あられ」は、雪あられの表面に、雲のつぶがくっついて水の膜をつくり、それがこおったものです。半とう明のつぶれにくいものです。

「ひょう」は、「氷あられ」が、直径 5 ミリメートル以上になったものです。

どちらも積乱雲の中でできることが多い

「あられ」は、積乱雲（かみなり雲、入道雲）が発達する夏や、冬の日本海側で降ることが多いです。

「ひょう」は、「あられ」が大きくなったもので、発達した積乱雲の中でできます。積乱雲の上の方は、氷のつぶができています。積乱雲の中では、空気が、激しい勢いで上がったり、下がったりしています。このようなことをくり返しながら、氷のつぶがだんだん大きくなっていきます。

空気が、上に上がる速さが速いときは、「あられ」のつぶが大きくなって「ひょう」になります。空気が上に上がる速さが、あまり速くないときは、小さいつぶのまま落ちてしまい、「ひょう」にはなりません。

1917年に埼玉県で、重さが3.4キログラムの「ひょう」が降りました。カボチャぐらいの大きさでした。（監修・村山 貢司）

